

2025年旅立たれた名演奏家を聴く

ロジャー・ノリントンとクリストフ・フォン・ドホナーニ

プログラム

今年は、惜しまれつつこの世を去った名演奏家の追悼として、秋山和慶氏、エディット・マティス、アルフレート・ブレンデルの特集を組みましたが、その後7月にロジャー・ノリントン、9月にクリストフ・フォン・ドホナーニの訃報がありました。今日はこの二人の名指揮者のライブ音源で故人を偲びたいと思います。

ロジャー・ノリントン (1934.3.16～2025.7.18) はイギリスのオックスフォード生まれ。ケンブリッジ大学クレア・カレッジで英文学を専攻し、カレッジの聖歌隊に所属。その後、王立音楽大学で、エードリアン・ボールドに指揮を学びました。卒業後はテノール歌手として働き、1962年にシュッツ合唱団を結成、指揮活動を開始しました。1969年から1984年までセント・オペラの音楽監督、1978年に古楽器オーケストラ、ロンドン・クラシカル・プレイヤーズを設立。斬新な演奏で一躍世界的な注目を集めるようになりました。1997年までこのオーケストラの音楽監督を務めた後、1997年から2006年までカメラータ・ザルツブルクの首席指揮者、1998年から2011年までシュトゥットガルト放送交響楽団の首席指揮者を歴任。ノリントンはこの時期に古楽での成果をモダン・オーケストラで活かし、ベートーヴェンやシューマン、ブラームスをはじめ、ブルックナーやマーラーなどの大曲も指揮するようになりました。日本へは2006年にNHK交響楽団を初めて指揮、2011年、2012年（年末の第九）、2013年、2014年にも客演して関係性を深めました。1997年にナイトの称号に叙され、2021年11月の演奏会をもって指揮活動から引退。2025年7月18日、イギリス、デボンの自宅で91年の生涯を閉じました。ノリントンは古楽界のバイオニア的存在でしたが、モダン・オーケストラを指揮するようになってからは、より音楽の表現力が拡がり、独自の世界を造り上げていました。

クリストフ・フォン・ドホナーニ (1929.9.8～2025.9.6) はハンガリーの高名な作曲家エルンスト・フォン・ドホナーニを祖父に持つ孫として、ドイツのベルリンで生まれました。ミュンヘン大学で法律を学んでいましたが、在学中の1948年に音楽の道に転じ、1951年ミュンヘン市の指揮者検定試験に合格。これを機に祖父のいるアメリカに渡り、フロリダ州立大学で作曲を学び、レナード・バーンスタインに師事しました。その後、ドイツに戻って指揮の勉強に専念、1955年フランクフルト歌劇場で本格的な指揮者デビューを果たしました。1957年、28歳でリュウベック歌劇場の音楽監督に就任すると、ドイツで最年少の音楽監督として話題を集めました。1964年から1969年までケルン放送交響楽団常任指揮者、1977年から1984年までハンブルク州立歌劇場の音楽監督とハンブルク・フィルの首席指揮者を兼任したあと、1984年から2002年までは名門クリーヴランド管弦楽団の音楽監督を務め、一時代を築きました。退任後は桂冠指揮者となり、その間、1997年から2008年までフィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者、2004年からは北ドイツ放送交響楽団（現NDRエルプ・フィルハーモニー管弦楽団）の首席指揮者となり、2011年までその地位にありました。その他、ウィーン・フィルやベルリン・フィル、シカゴ響など、世界の一流オーケストラに数多く客演し、現代を代表する名指揮者のひとりとして活躍しましたが、2025年9月6日、ミュンヘンで95年の生涯を閉じました。ドホナーニの指揮は、明晰で引き締まった造形美をつくり、バランス感覚に優れた、クリアで力感溢れる音楽を生み出します。多くの指揮者の中でも傑出した存在でした。（中川）

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756～1791) :

交響曲第25番ト短調K.183

ロジャー・ノリントン指揮ヨーロッパ室内管弦楽団
(1993.9.14 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

フェリックス・メンデルスゾーン (1809～1847) :

交響曲第5番ニ長調Op.107 “宗教改革”

ロジャー・ノリントン指揮シュトゥットガルト放送交響楽団
(2008.2.22 リーダーハレ内、ベートーヴェンサールでのLive)

*** 休憩 ***

フェリックス・メンデルスゾーン (1809～1847) :

序曲 “静かな海と楽しい航海”

クリストフ・フォン・ドホナーニ指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1983.6.2 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

ロベルト・シューマン (1810～1856) :

交響曲第2番ハ長調Op.61

クリストフ・フォン・ドホナーニ指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(1991.11.10 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

曲 目 解 説

モーツァルト：交響曲第25番ト短調K.183

モーツァルトは13歳の1769年から1773年にかけての3回にわたるイタリア旅行を終え、1773の夏には3回目のウィーン旅行を行ないました。ここで当時のウィーンの音楽家やハイドンの音楽に触れ、モーツァルトの音楽も大きく飛躍して行きます。この時若いモーツァルトの心をとらえたのが「シュトルム・ウント・ドラムク」という、理性よりも感情を重んじる芸術運動で、9月末の帰郷後もそれは心から離れませんでした。この頃に一連の交響曲が作曲されましたが、特に交響曲第25番ト短調は多情多感な力がみなぎっていて、17歳の若きモーツァルトを代表する傑作として知られています。全41曲あるモーツァルトの交響曲のうち、短調で書かれたのは有名な第40番と、この第25番だけで、別名「小短調」の愛称で親しまれています。また1984年のミロス・フォアマン監督による名作映画「アマデウス」の冒頭でこの曲が使われたことで、一層ポピュラーな存在になりました。オーボエ2本、ファゴット2本のほか、当時としては珍しいホルンが4本使われていることも注目されます。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ

第2楽章 アンダンテ

第3楽章 メヌエット

第4楽章 アレグロ

メンデルスゾーン：交響曲第5番二長調作品107 “宗教改革”

富裕で教養のある家庭に育ち、38歳という若さでこの世を去った初期ロマン派の代表的な作曲家、メンデルスゾーンは、生涯5曲の交響曲を残しました。この曲は1830年6月に行われるマルティン・ルターの宗教改革の300年祭記念式典のために委嘱され作曲されました。1829年9月から取りかかり、1830年4月に完成しますが、記念式典は中止となり、楽譜をパリ音楽院管弦楽団の指揮者アブネックに送りますが演奏されず、結局初演は1832年11月にベルリンのジグア카데미で自身の指揮によって行われました。メンデルスゾーンの死後1868年2回目の演奏がパリで行われ、この時初めて出版されたため、実際には2番目の交響曲ですが、第5番という番号が付けられています。2つのコラール（ルター派教会で歌われる賛美歌）が使われ、宗教的素材を生かしていますが、リズミカルな第2楽章、短いながら美しい旋律がのびのびと歌われる第3楽章を挟んだ偉容にみちた両端楽章など多くの魅力を持った名曲です。

第1楽章 アンダンテ – アレグロ・コン・フォコ

第2楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

第3楽章 アンダンテ

第4楽章 アンダンテ・コン・モート – アレグロ・ヴィヴァーチェ

メンデルスゾーン：序曲 “静かな海と楽しい航海” Op.27

メンデルスゾーンは1821年、12歳の時に初めて詩人ゲーテに会いました。この時、目の前でバッハの作品と即興のピアノ演奏を披露し、ゲーテを魅了しました。メンデルスゾーンはその後、たびたびゲーテ宅を訪れましたが、メンデルスゾーンが20歳、ゲーテが80歳の1830年が最後となりました。序曲「静かな海と楽しい航海」は、1815年に同名のカンタータをベートーヴェンが作曲していて、もともとゲーテの「静かな海」と「楽しい航海」という別々の2編の詩を並べて音楽にしたものでした。メンデルスゾーンもこの偉大な作曲家に追随する形で、1828年にベートーヴェンが合唱を伴った作品だったのに対し、メンデルスゾーンは純粋な器楽のための演奏会用序曲として作曲しました。1832年に改訂稿が完成しますが、その年ゲーテは82歳でこの世を去りました。ゆったりとしたアダージョで始まる「静かな海」から休みなく続く「楽しい航海」は、快活な音楽に変わり、順風に進む船がやがて、目的地の港に入港する喜びを生き活きと表現しています。

シューマン：交響曲第2番ハ長調作品61

ロマン派を代表する大作曲家シューマンは生涯4曲の交響曲を残しましたが、第1番はクララと結婚した翌年1841年1月から2月の短期間で完成し、それから数ヶ月たった9月には、2番目の二短調の交響曲が完成しましたが、後に改訂されて出版されたため、交響曲第4番となりました。シューマンは1843年からライプツィヒ音楽院で教鞭を取るようになりましたが、性格的に向かない仕事だったことが原因で、次第に神経を病むようになっていき、1844年12月に教職を辞任、家族とともにドレスデンに住むことになりました。交響曲第2番ハ長調はそんな精神疾患に悩んでいた1845年から1846年にかけて作曲され、1846年11月5日にライプツィヒでメンデルスゾーンの指揮で初演されました。楽譜はスウェーデン国王オスカー1世に献上されました。曲はハ長調という調性をとりながら、全体は苦悩に満ちた闘争的な雰囲気をはらんでいます。人気の点では他の3曲に劣るものの、シューマンの個性がよく示された、最高傑作のひとつに数えられています。

第1楽章 ソステヌート・アツサイーアレグロ・マ・ノン・トロツポ

第2楽章 スケルツォ・アレグロ・ヴィヴァーチェ

第3楽章 アダージョ・エスプレッシーヴォ

第4楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ